報告：古代朝鮮半島における コンタクト・ゾーンの人々

中央大学校歴史学科副教授
李 在晥（イ・ジェファン）

二〇二〇年六月、韓国で「歴史文化圏整備などに関する特別法」が制定され、高句麗、百済、新羅、伽耶、馬韓、耽羅の六つの歴史文化圏が設定された。二〇二一年には中原と濊貊、二〇二三年に後百済が追加され、計九つになった。高句麗、百済、新羅は過去の国名が用いられており、地域のアイデンティティを強調していることを感じさせる。「小さなナショナリズム」をも連想させるが、実際には現代の意図や必要性に基づいて設定されており、政体や種族を示すものではない。

伽耶や馬韓は特定の国家ではなく、文化的に類似する地域を指し、その範囲は拡大されている。濊貊も国名ではなく、江原道の歴史文化圏として選ばれたが、実態は不明確である。これらの地域は「接境空間」として、特定の国名を持たない「中原歴史文化圏」として表現される。

メアリー・ルーズプラットの「接境空間」概念は、異なる文化や勢力が交わる場所を指し、忠州高句麗碑を通じてその特性が検討されている。忠州の歴史は高句麗、新羅、百済の影響で複雑に変遷してきた。高句麗の忠州占領時期は不明確で、碑文は進出を示すが、領域化の証拠は曖昧である。五世紀には嶺南北部の首長勢力が高句麗に服属したが、新羅の領域化も未完成だった可能性がある。最近の発掘調査で百済の土器が見つかり、五世紀前半に百済が忠州を管理していた可能性が示唆されるが、忠州が百済の地であったかは不明である。忠州地域の原勢力の詳細は依然として謎である。

〈忠州高句麗碑〉や〈広開土王碑〉では、忠州周辺の住民を「諸夷」や「新来韓穢」と呼んでいるが、これが住民の自己認識を示すわけではない。『三国史記』では「靺鞨」が彼らを指す可能性があるが、単一の集団ではない。韓半島中部以南の馬韓、辰韓、弁韓の具体的な位置や範囲も特定困難で、『三国志』に記載されていない国々の存在も考慮が必要である。歴史は中国や高句麗、新羅、百済、日本によって掌握されていった過程であり、過去の名前を無理に復元することや物質資料を無理に結びつけることは危険である。

プロフィール

●韓国古代の歴史および東アジア文化交流史を専門とする。近年の研究の関心は、木簡や石碑などの文字資料を活用した古代朝鮮半島の生活の再構成にある。おもな業績に「七世紀中・後半東北アジアの戦争をどのように名付けるか」（『歴史批評』一二六、ソウル、二〇一九）、「永楽七年判読に基づく〈忠州高句麗碑〉の内容の検討と忠州地域の接境性」（『木簡と文字』二七、ソウル、二〇二一）などがある。